

日本のこころ②「風姿花伝」世阿弥

1 ウォーミングアップ

- ① 役得でチケットをもらう

- ② 知性あふれるオーラに包まれる

- ③ お高く留まる（とっつきにくい）

- ④ 雨後の筍
- ⑤ 一夜漬け（付け焼刃）
- ⑥ 土偶
- ⑦ 東大寺大仏の開眼供養
- ⑧ 秦の始皇帝
- ⑨ 檜舞台（比喩的な意味）
- ⑩ 初心忘るべからず（通俗的な訳語）

- ⑪ 耳学問
- ⑫ 水を打つような静けさ
- ⑬ 舟をこぐ（白河夜船）
- ⑭ 引き潮、満ち潮
- ⑮ 目からうろこが落ちた
- ⑯ 島流し
- ⑰ 津々浦々
- ⑱ 「第九」の合唱
- ⑲ デジャヴ
- ⑳ 「草の根」の能

2 翻訳

- ① ホールに入ると、向かって右に四角形の檜舞台があり、左側に能楽師が登場・退場する際に歩く橋掛かりが見える。この橋掛かりは舞台裏＝あの世、檜舞台＝この世をつなぐ、いわば三途の川のようなものである

- ② 幼稚園児ぐらいの子どもが演じれば未熟なところが健気でかわいらしい。

- ③ 観阿弥・世阿弥は「秘すれば花」という言葉を残しているが、魅力というものは最初から「出血大サービス」するものではない。

- ④ インバウンド政策でいうなら、2010年代の日本の魅力を発信しつくすのではなく、あくまで「高嶺の花」を貫くヒマラヤ山脈に抱かれた秘境、「幸せの国」ブータンのような「控え目な見せ方」こそがあるべき姿なのかもしれない。

- ⑤ 博物館で見る能面には違和感があり、いただけない。あれは能楽師が着用してこそ活きた面になるのだ。

- ⑥ 能面は喜怒哀楽がはっきりしないように見える。

- ⑦ 能を大成した観阿弥・世阿弥親子は「ヴェールをかぶった女性的な美しさ」、「見終わってからもしみじみと伝わってくる奥深さ」を「幽玄」と呼び、上流階級の人々の美意識にうたえていったのだ。

- ⑧ 「風姿花伝」は人前に立つ芸人の効果的な見せ方にこだわって書かれた実用書である。同時に、長い間芸を志す人々だけではなく、様々なジャンルのプレゼンをする人々の指針となってきた。

(宿題はここまで)

3 通訳（受講日までご覧にならないでください。）

- ① 日本最大の博物館だけあって、上野の東京国立博物館には能楽に関する展示もある。7世紀前後の日本において文化の担い手は渡来人が中心だった。彼らのもたらす文化がいかにこの列島の人々に夢を与え、憧れの対象となったかは想像に難くない。

- ② 京都の太秦^{うづまさ}を拠点とした彼らは、大陸から歌舞だけでなく、手品や物まね、曲芸なども含む「散楽」をもたらしたという。そしてそれらのうち俗なものを取り除き、格式高い「能」として大成させた末裔が観阿弥であるという。

- ③ 能楽師が衆人環視のもとで面をつけるのは、自らの姿を偽るための「仮面」ではない。面をつけてこそ本物の役に同一化できるという意味では、素顔のままのほうが「仮の姿」である。

- ④ 舞台では役者が600年前の日本語で語っているので、私は耳を澄まして理解しようと試みた。周りの常連客は、台本を持ち込んで確認したり、そらんじている人は口ずさんだりしている。「丸腰」でやってきた私はまさにチンプンカンプンだ。

- ⑤ 能のストーリーの典型パターンは、まず旅の僧が登場する。つぎに成仏できない霊が登場して無念を僧に告げる。そして心の内をさらし、すっきりした霊が舞台を去る。最後に僧も舞台を去る。という順である。

- ⑥ 狂言というのは本来能の前半と後半の間に行う滑稽な劇であり、能面はつけない。奥深く哲学的、宗教的でさえある能の途中で、いきなり喜劇が始まる。むしろ張り詰めた空気を一度リセットするという意味があるのだろう。

⑦ 人口 1300 万人の東京における能楽堂の数は十数カ所。人口 100 万人あたり一カ所である。一方、人口 5 万人の佐渡には能楽堂が三十数カ所。島民千数百人に一カ所、能楽堂がある。

⑧ 檜舞台で音がうまく出なくても、みんなが暖かく見守る、その懐の深さに驚いた。皮肉ではない。ここでは舞台の上に立つ人も、下で見る人も、地元で子供のころから能をみてきて、目はこえていても、みな共同体の身内なのだ。そこに島民の間の絆を感じた。

4 スピーチテーマ

①A 文楽 B 落語 C 一幕席

②A 漫才師 B 花道 C 隈取

③A 神楽 B 金山 C 埴輪